

幼児教育におけるピアノ弾き歌いの意義と練習方法についての考察

川崎 美砂子

(2017年12月27日受理)

The Significance of Singing with the Piano at Preschool Education, and the Consideration about the Way to Practice

Misako KAWASAKI

要旨：幼児教育の現場において、教諭または保育士などに求められる音楽的な能力のひとつに「ピアノを弾きながら歌を歌う」がある。

本学の幼児教育学科の学生に「ピアノ弾き歌い」のレッスンをするに当たり、現場で求められる技量と学生の現状を把握し、その効率的な練習方法や意識の持ち方について考察する。

Key words：ピアノ弾き歌い

1. はじめに

幼児教育、保育の現場において「音楽」は非常に重要なものである。

朝の挨拶、食事の挨拶、帰りの挨拶など、「歌を歌うこと」は園生活の中で物事にけじめをつけ、メリハリをつけるのに欠かせない。歌を歌うことを通して生活習慣を身につけ、自然にコミュニケーション能力を育むことができる。

また、一年を通しての行事の歌、日本の四季折々の季節感あふれる美しい歌を歌うことは、幼児期の情操教育の面でも大変意義のあることで、欠かせないものである。歌を歌うことを通して、言葉や知識を身につけることができるだけでなく、歌の中で歌われている多様な世界を経験することができ、様々な感覚を身につけることができる。

更に、園の大きな行事のひとつに「発表会」があるが、みんなで合唱や合奏をする場であり、オペレッタなど音楽的な舞台作品を発表する機会も有る。

このように、園生活における「音楽」の存在意義は大きく、歌の指導は勿論のこと、伴奏など、教諭または保育士に求められる「ピアノを弾きながら歌

う」ことの力量は計り知れないものが有ると思われる。

2. 学生の音楽的素養について(アンケートの結果)

自分が担当している I 回生「音楽」の授業で、学生にアンケートを実施した。

(1) ピアノの経験について (図 1)

幼少期から現在まで継続してピアノを習っている学生が 5% なのに対し、本学に入学してからピアノを始めた、又は入学を決めてから習い始めたという学生は 58%。

ピアノについて、過半数がほぼ初心者ということ

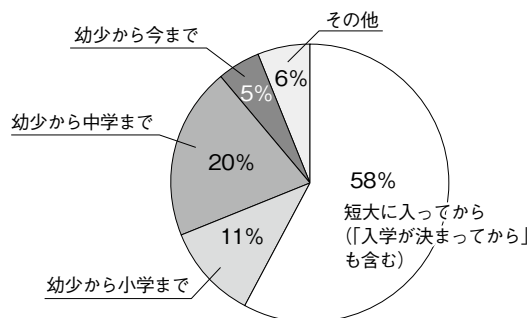


図1 ピアノの経験について

になる。

(2) その他の音楽経験について (図2)

その他の音楽経験は、吹奏楽が25%、合唱11%、電子オルガン5%、その他打楽器など8%、ピアノのみ21%、学校の音楽の授業のみ30%。

合唱は勿論、吹奏楽経験のある人は、腹式呼吸が身につけており、比較的息が流れやすく無理のない発声ができている場合が多いので、歌を歌うには良い傾向であると考えられる。

また、音楽的にも密度の濃い経験をしていると考えられる。「音楽は楽しい」「頑張ればより良い音楽ができる」ことを知っていることで、本人の音楽に対する考え方、取り組み方がより前向きである可能性が高いと期待できる。

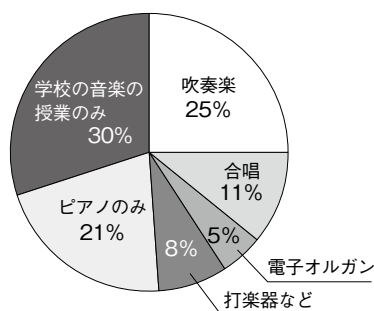


図2 その他の音楽経験について

(3) 「歌うこと」について (図3)

カラオケで歌うのが好き、など歌を歌うことが好きという人は61%。しかし、歌を歌うことは好きだが人前で歌うのは苦手、という人が多い。

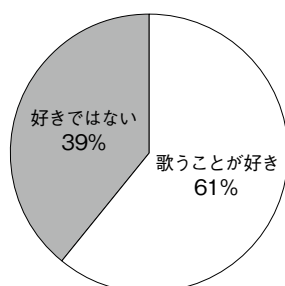


図3 「歌うこと」について

(4) アンケートの結果から、本学に入学するまで、音楽的な経験が学校の音楽の授業程度であるという学生が全体の3分の1を占めることがわかった。し

かしその中でも、歌うことが好きと答えた人も多く、ピアノが苦手でも歌うのは好きという学生は多い。

3. 「ピアノ弾き歌い」とは

文字通り「ピアノを弾きながら歌を歌う」ということであるが、これには大きく分けて2通りあると考える。

ひとつは、ピアノと歌がそれぞれ独立していて、歌唱部分の旋律を歌唱し、ピアノで伴奏部分を演奏するというスタイル。

もうひとつは、歌唱部分と右手の旋律が一致して、左手は一貫して伴奏部分を演奏する、というスタイルである。

幼児教育の現場において求められる「ピアノ弾き歌い」は、子ども達が歌唱部分の旋律を聴き取り易くなるように「右手で歌唱部分の旋律を演奏しながら歌う」という状態が望ましいと思われるので、ここでの「ピアノ弾き歌い」とは、後者のスタイルのものとする。

4. 「ピアノ弾き歌い」の良さと必要性

幼児教育の現場において、教諭または保育士が子ども達に歌を教える場合、CDなどの音源を使用するという方法も考えられる。これには、使い方次第で良い面もたくさんあると思うが、対して子ども達の前でピアノを弾き歌うという指導法には、まず、スピーカーを通さない楽器の生の音と生の声もたらず温かみがある。子ども達の様子をみながら、子ども達のペースに柔軟に合わせる事が出来る。(例えば、ゆっくり歌わせる、できるようになってきたら少しずつテンポを上げる、違っているところを聴き分け必要に応じて繰り返す、など)理解が追いついていない子どもの把握も可能になるし、対応もできる。

子ども達にとっては、いつも一緒にいてくれる大好きな先生が、ピアノを弾きながら楽しく歌を教えてくれることで、その歌をより身近に感じる事ができ、楽しく習得できるであろう。

5. 「ピアノ弾き歌い」の難しい点

(1) アンケートによると(図4)ピアノ弾き歌いの難しい点として圧倒的に多いのが「ピアノだけ、歌だけならできるのに、両方を一度にやろうとするとうまくできない」という意見である。確かに、一度にいくつものことをやらなければならないという印象がある。

特にピアノの初心者にとってはピアノを弾くだけでも四苦八苦しているのに、そこに歌をプラスすることは至難の業であろう。歌が苦手な場合はなおさらである。これでは、弾き歌いの大きな目的である「子どもの様子を見ながら歌を指導する」ことが、非常に困難になるのは目に見えている。

(質問項目)

「ピアノ弾き歌い」をしていて、難しいと感じることは何ですか。

- 声がうまく出せない
- 歌がうまく歌えない
- ピアノと歌を同時にやるのは難しい
- 一度つまずくと分からなくなる

図4 アンケートから

(2) 日々のレッスンの中で、学生がピアノ弾き歌いをする様子を見ていて気になるのは、ピアノを少しでもミスタッチすると、止まって弾き直しをすることである。正確な読譜力は必要不可欠であるし、最終的にはミス無く弾き歌いが完成することが望ましいが、楽譜どおり正確に弾かなければと思うあまり、学生はミスタッチを怖れて楽譜と指にかじりつき、「弾き歌い」というには程遠いところで四苦八苦することに陥っているように思う。

現場におけるピアノ弾き歌いの際に求められるのは、「歌を止めずに最後まで演奏すること」である。「間違えずに演奏すること」ではない。音楽を止めてしまうぐらいなら、多少のミスがあっても止まらず演奏できる方がよほど心地よいのに。学生はそこに気づいていない。

6. 練習方法の現状

アンケートで「弾き歌いの練習方法」についてきいてみたところ、ほとんどの学生が以下のように答えた。

- ①ピアノだけの練習をする
- ②右手でピアノを弾きながら歌を歌う
- ③両手でピアノを弾きながら歌を歌う

普通に考えればこの順序と方法で練習するのが一般的と思われる。

しかし、学生のほとんどが、まず①の際に膨大な労力を要する。慣れない音譜を懸命に読み取り両手でスムーズに弾けるようになるのは、ピアノ初心者には大変なことである。(勿論、本学の学生は皆ピアノのレッスンを受けており、練習を積み重ねることにより個人差はあるがピアノ演奏の技術が着実に向上していることは言うまでもない)

練習を積み重ねてやっと①をクリアして②に到達したところで、右手を弾きながら発する声は、ほとんどの場合残念ながらごく小さなものである。

そのあとで、満を持して③に入る。が、あんなに頑張っただけで両手で弾けるようになったはずなのに、いざ歌を歌ってみるとピアノが弾けない、止まってしまふ、だから歌も止まる、声も更に小さくなる、ということになってしまっているようだ。

「歌うのが好き、ピアノを弾くのも好き。でも一緒にしようとするとうまくできない」という意見が多く、この悩みが切実なものであると思われる。

7. 練習方法についての疑問点

ここで、ひとつの点について疑問を持った。

①～③の練習項目の中に、「歌の練習をする」という項目がなかったことである。確かに②と③は、ピアノを弾きながら「歌を歌う」ということであるが、単独で「歌」だけの練習をする時間が組み込まれていないのである。「ピアノ弾き歌い」はピアノを弾くことであると同時に歌を歌うことであり、歌を指導することである。なぜ「歌」だけの練習をしないのか。私には理解しがたいことである。学生にこの質問をしてみたところ、「知っている歌を選んでいるから、歌だけの練習はしなくてもいいと思っ

ていた」とのこと。

「歌」は知っていても、体を使って声をしっかり出して歌わなければ、「歌える」とは言えない。その歌の内容や、歌う目的、歌の生まれた背景、いろいろなことを知って共感できていなければ、その歌を「表現できる」とは言えない。その歌をよく理解して、楽しんで歌うことができなければ、その歌の良さや楽しさを「指導できる」とは言えないのではないだろうか。むろん、「ピアノを弾く」ということに対しても然りである。

実際、学生にきいてみると「大きなたいこ」(作詞 小林純一、作曲 中田喜直)では、『大きなたいこ、ドーンドーン』と小さな声で歌っていても何も問題を感じていないようである。「めだかの学校」(作詞 茶木 滋、作曲 中田喜直)では、めだかが『つーいつい』と泳ぐのを見たことがないそうである。「おもちゃのチャチャチャ」(作詞 野坂昭如、作曲 越部信義)の『チャチャチャ』とはなんのことか、どんな音楽であるかを知らなかった。ピアノを弾くのに必死なのでそこまで気が回らないというのだが果たしてそれでいいのだろうか。

現場において、子ども達が歌を歌うことの意義、その歌を教諭または保育士が子ども達に教えることの必要性、そしてその際に重要な「ピアノ弾き歌い」の在り方を考えた時、「ピアノ弾き歌い」をして歌を指導する側は、その歌を深く理解し消化した上で、少なくとも「ピアノを弾く」ことや「弾きながら歌う」ことを卓越して、それをしながら「子どもとコミュニケーションをとる」立場であるべきである。

8. 練習方法の提案その1

以上のことを通して、学生のピアノ弾き歌いの現状が把握できた。

まず、練習の段階において、ピアノだけの練習をたくさん積み重ねているにもかかわらず、歌が入った途端にピアノが弾けなくなってしまうことをどのように解決したらよいかと考え、次のような練習方法を提案する。

ステップ①「ピアノのみ」の練習

ピアノパートの練習は従来どおりしっかり積み重ねる。

ステップ②「歌」の練習

歌を繰り返し歌い、記憶する。できれば立ち上がって発声の基本をしっかりと意識しながら体を使って歌う。声を響かせる方向も意識すると良い。

歌詞の内容を理解し、言葉を明確に発音して歌う。発音を明確にすることを目的として、上唇や舌の使い方に注意するとよい。歌詞の内容などに興味関心を持てば、必然的に意味を調べることになる。その歌の成り立ち、作られた背景など、調べることはいくらでもあるだろう。インターネットで検索すればその曲の情報が簡単に手に入るの、大いに利用すべきである。読んでみると、「なるほど!」「へえ!」と思うことになるだろう。その曲に更に興味関心が湧き、歌詞にある言葉に自分なりの解釈やイメージを持って歌うことができるようになるであろう。更に、検索結果画面上に演奏の動画なども多く表示されるので、視聴しない手はないであろう。

その歌に手遊びや振り付けなどがあればそれもやってみる。自身で考え創作しても良いだろう。相手が必要なら友達とやってみるのも良い。大いに盛り上がり楽しむのも大切なことである。

膨らませたイメージを、絵に描いてみたりするのも良いだろう。

子どもがこの歌を歌って、何を感じ、何を習得し、どんな時間を過ごすことになるのか、この時点で自身もそれを経験し実感する必要がある。重要なのは、自身がそれを子ども達に教える立場であることを常に意識していることである。

ステップ③「歌」と「ピアノ(右手)」

ステップ②と併行して行う。ピアノの前に座り、歌を歌いながら右手で歌唱部分の旋律を弾く。おそらくステップ②で「歌」に取り組んだことにより、歌についての意識が格段に上がっていることは間違いない。そうすると「歌を歌うこと」をより確実に意識してピアノを弾くことができる。ステップ①で技術的な練習ができていたので、「歌」へのイメージを自身の中で確実に持ち、自身が歌を歌うように

旋律を奏でられるはずである。

この練習を十分に繰り返す。楽譜を見なくても、頭に浮かぶ次の旋律が口や体から湧き出るように右手の指が動くようになるまで練習を積み重ねる。

ステップ④「両手でピアノを弾きながら歌を歌う」

最終形である。ここでもやはり練習の積み重ねは必要であろうが、「歌」にしっかりと取り組んだ成果は確実に現れる。なぜなら、音楽を運んでいるのは、「ピアノ」ではなく自身の歌う「歌」になっているからである。

自身が「この歌を歌いたい」「こう表現したい」「この気持ちを伝えたい」「このことを知ってもらいたい」など、この歌に対しての確固たる信念が、音楽を牽引するだろう。それにより、ピアノを弾く際の余計な力みも軽減されるに違いない。

9. 練習方法の提案その2

次に、音楽を止めずに最後まで演奏できるようになるために、ピアノの楽譜にとらわれすぎない方法を習得することを提案する。以下の3点である。

(1) 「探り弾き」のススメ

歌いたい曲の旋律を右手だけで「探り弾き」することを大いにやってもらいたい。楽譜を見て正しく音楽を読み取ることは必要であるが、耳から入ってくる音を思い出しながら探り弾きすることで、楽譜に頼らず旋律を弾くことができるようになる。そうすればせめて右手は楽譜やピアノにかじり付かなくてもよくなる。他のところに注意を向けることが可能になる。

(2) 楽譜を「縦」にも読む癖をつける

右手だけ、左手だけ、歌だけ、と言う風に五線を「横」に読んでいくことも重要であるが、「縦」に見ると、その瞬間にどんな音が鳴らされるべきか、一瞬の全体像が把握できる。その瞬間の音が把握できたら、できればそれを全部弾くのではなく、必要な音を1音でも弾ければよいのである。

(3) コードネームによる簡単な伴奏付けのススメ

コードネームについては、「音楽」の『通論』の授業で習っているので、ここで触れる必要もないようにも思ったのだが、学生にコードネームをどこまで活用しているかきいてみると、「難しい」「使っていない」などという声が多かったので、非常にもったいないと思った。きくと、「弾き歌いの曲の譜読みが大変で、コードネームを見て弾く時間や機会がない」と言う。これでは本末顛倒である。コードネームと言っても、難しいことは必要ない。Cとか、Gといったいわゆる「根音」だけを左手でとらえられればよいのである。慣れてくれば和音にするなり、転回するなり、分散するなりが可能になる。

10. 自分のピアノ弾き歌い歴

自分自身のピアノ弾き歌いについて紹介する。

自分がピアノ弾き歌いを始めたのは中学1年の時である。中学生になって合唱部に入部し「歌うこと」に運命の出会いをした頃のことである。ピアノは3歳から習っていたので普通に弾けるレベルではあったが、特別上手でもなかった。

毎日、音楽の教科書を広げてピアノ弾き歌いをしていた。とにかく教科書に載っている曲は全部歌えるようになりたいと思っていた。教科書は旋律譜のみの場合もあったので、適当に左手で伴奏のように鍵盤を押さえながら歌っていた。

また、小学校で使っていた副教材の本を使い、ピアノを弾きながら歌っていた。旋律譜にコードネームが付いている譜面だったので、コードネームを見て適当に伴奏を付けた。コードネームの知識は無かったが、ドイツ音名は知っていたのでなんとなくアルファベットのとおりの単音を左手で鳴らすことから始め、そのうちコードネームもわかるようになった。

当時流行していた商業用の曲などにも取り組んでいた。譜面が無ければ思い出しでは探り探りそれらしく前奏なども付けてみたりした。

また、合唱の響きがとても好きだったので、合唱部で歌っている曲のソプラノ、アルト、テノール、バスといった4つのパートを一度に弾くことに熱中した。それにピアノ伴奏のパートをかいつまんで弾

きながら、自分のソプラノパートを歌う、ということもやっていた。まさに「楽譜を縦に読む」と並行して「横」にも読みながら歌も歌っていたことになる。

そして何より、中学生の自分は、ただ「歌うこと」が大好きで、その曲が大好きでどうしても歌いたい！という一心で弾き歌いに取り組んでいた。「歌」が主体の練習である。

中学生の頃から始まった私の「ピアノを弾きながら歌を歌う」ことは、その後もずっと続き、今の自分に欠かせないものになっている。

10年ほど前から、公民館で「童謡を歌いましょう」という講座を持っているが、基本的には自身の弾き歌いで指導している。比較的高齢の大人の方が対象であるが、やはり右手で旋律を弾いた方が歌いやすいと言うので、右手で旋律を弾きながら左手で適当に伴奏を付け歌っている。曲によっては楽譜の音が少し高すぎる（低すぎることもある）ということで、急遽その場で全体の調を上げたり下げたりということはしょっちゅうである。CDなどを使うこともあるが、受講者のみなさんが、CDでは少しテンポが速すぎて歌いにくいと言うので、息づかいに合わせてゆっくりピアノで伴奏することが多い。実際皆さんは、CDよりも私の適当なピアノのほうが歌いやすいと言ってくださる。楽譜がなくても、とにかく臨機応変に、柔軟に対応できる者でありたいと思っている。

11. 省 察

この1年で、私がピアノ弾き歌いのレッスンを担当した4人の学生（Ⅱ回生）について省察する。

(1) Aさん（ピアノ歴は本学入学～）

第一印象は「ピアノの音が大きい」こと。練習はよくやっていると思うが、とにかくピアノへの苦手意識から一生懸命弾いているという印象。ピアノを一生懸命に弾くあまり歌に全く意識が行かず、歌声がピアノにかき消されている。

とにかく「音楽を止めないこと」を目標にまずはピアノを練習。次は歌いながらの右手の練習。次に歌だけを歌う時間を多くとった。自分が弾き歌いを

している中で、意識して「歌うこと」に神経を注ぐようにした。

直近のテストでは、ピアノが歌をかき消すこと無くちょうど良い音量で弾けるようになっており、言葉もはっきりと聞き取れる歌になっていた。本人曰く、これまでのテストの中で初めて、ミスもなく、満足のいく演奏が出来たようだ。

(2) Bさん（ピアノ歴は小学校6年間）

歌う声が小さく、届かない。ピアノもしょっちゅう止まってしまう。

まず発声の指導をする。体の使い方から基本的なことを確認した後、声の響明する場所をもう少し上の方（口蓋から副鼻腔へ抜けるところ）に意識するようにした。同時に上唇を意識して使うようにし、言葉を伝えるなど歌うことへの意識向上に時間を割いた。

ピアノについては、やはり楽譜にとらわれすぎて音楽が流れなくなっている傾向があるので、よく練習することは勿論だが、曲のイメージを大切にしながら、弾きやすいように多少自分でアレンジすることをすすめてみた。

声の通りが徐々に良くなってきた。歌うことに意識が行くようになってきたので、ピアノの余計な力が抜けてきたように思う。

(3) Cさん（ピアノ歴は小学1年から5年間）

ピアノは比較的良好に弾ける。が、曲中で焦り出すとどんどん速くなってしまいう傾向がある。まずは、その曲をよく調べてみて、いったいどんな場面で歌われるのか、この曲を歌うことでどのようなことが求められるのかをよく考えた上で、最適なテンポ設定を行うように指導した。

伴奏については、コードネームを見て自由に弾く機会を増やしている。コードネームは主要なものはわかるようである。初めのうちはやはり、楽譜どおりに弾かないことへの抵抗感が感じられたが、弾き歌いの必要性について話をしたからか、最近積極的に取り組むようになった。

「げんこつやまのたぬきさん」(わらべうた) に自

分で伴奏を付けてきた際は、なかなか斬新でおもしろいものになっていたのは興味深かった。

(4) Dさん(ピアノ歴は本学入学～)

ピアノはほぼ初心者だが、弾くことは大好きで習っていない時期も自己流で弾いていたようだ。歌唱は苦手だと自分では言っている。少し息漏れがあるので、息が続かない、声を通らないなどの問題を感じているようである。

「はじめの一步」(作詞 新沢としひこ、作曲 中川ひろたか)を弾き歌いのテストでどうしてもやりたいたいと言って持ってきた。正直、ピアノの技術的にもちょっとDさんには難しいかもしれないと思ったのだが、この曲がとても好きな様子で積極的な意欲が感じられたのでそのまま進めた。

ピアノの練習はとてよくやってあったが、ペダリングに問題があったのでタイミングを指導する。その次のレッスンの際「歌に自信が無い」と言うので、まるごと1回分のレッスンを、歌唱のレッスンに当てることにする。発声の基本である体の使い方から言葉の扱い方まで、声楽的な指導の時間を持った。聞くところによるとDさんは、曲の練習に入る際は必ずインターネットなどで音源や動画をチェックしているそうである。やはりその成果は有るようである。

直近の弾き歌いのテストでは、右手も左手も伴奏で、歌のみが旋律を担当するスタイルの弾き歌いで、この「はじめの一步」という曲を見事に演奏した。

多少のミスタッチはあったが、音楽が不自然に止まることは無かった。ペダルは改善されていて歌を消すことも無かった。やはり多少息漏れのする声ではあったが、何より、このメッセージ性の強い曲の歌詞が、Dさんの心からの言葉となって伝わってくる「歌」になっていた。

12. まとめ

「ピアノ弾き歌い」をする際と、「ピアノのみの演奏」をする際とでは、意識の持ち方が違うことに気づかなければならない。ピアノだけでなく音楽の経験の少ない学生が、ピアノを弾けるようになるのに大変な努力をしていることは言うまでも無いが、そのままの意識でピアノ弾き歌いに取り組んでしまうと、なかなかスムーズにはいかなくなってしまうようである。

そして現実として、ピアノを弾くことに懸命になっているあまり、ピアノ弾き歌いをする際に一番重要な「歌」への意識が少なくなってしまう。

「歌」への興味関心を持ち、レッスンの際に声楽的な時間を多く持つことに努め、「歌うこと」に自信を持ち「歌」が音楽を牽引することができるようになれば、「ピアノ弾き歌い」がよりスムーズに、より音楽的になることが実感できた。

また、楽譜にとらわれすぎず、曲のイメージを膨らませコードネームの知識などを生かして自由に伴奏付けをすることにより、音楽にも積極性が感じられるようになってきたように思う。

もちろん、継続的な辛抱強いピアノのレッスンと、真面目な自主練習の裏付けによるものは大きいと思うが、「歌」の観点からの「ピアノ弾き歌い」のレッスンの実施を切に願うものである。

これにより、豊かな音楽性に満ちた「ピアノ弾き歌い」のできる者が増え、幼児教育の現場において、魅力的な音楽的指導が実施されることを心から願っている。